

元都市デザイン室長・小沢朗（おざわあきら）ヒヤリング記録

2018年10月12日（金）午後3時～5時30分

桜木町市民活動支援センター5階

インタビューア：田口俊夫（NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会）、田村千尋（同）

記録

田口俊夫 都市デザイン室の年表を作りました。どなたがどういうふうに通務していたかが分かるものです。これは事務分掌です。それで、ここで景観調整課が都市デザイン室から分かれた。市長が誰だったかとか。これは係長さん以上ですけど、誰がいたかとか、それで、事務分掌がどういうふうに変わっていったかっていうのも見たりはしました。というのは、私自身が分かっているのは、自分がいた時だけなので。それ以外のことは、伝聞でしか分かっていなくて、あとは、市大の鈴木伸治先生がまとめられた冊子と、もう一冊、最初のを熟読はしたけど、それでも分からない部分はたくさんある。もう一つは、鈴木先生がまとめた意図が垣間見えるので、鈴木先生の戦略があるんです。だからそれに応じたまとめ方になっているという感じがするので、もう少し客観的に物事を見直してみたいというふうにも思っています。そんな感じで質問項目はお送りしたのですが、最初に小沢さんのプロフィールを教えていただけますか。

小沢 プロフィールって、大したプロフィールはないんですけど、まず1956年、静岡県生まれ。静岡県出身なんです。焼津市という静岡市の隣に生まれました。実は、父が旧制静岡高校だったんです。

田村 じゃあ、明の先輩じゃないですか。

小沢 田村さんにこのことをお話ししたときにも、全く同じ反応をしていただきました。私自身は高校1年生のときに横浜に引っ越してきました。父の仕事の都合で。父はエンジニアとして山下町にオフィスがあって、私は転校試験に運よく合格できて、田口さんの奥さんの高校の後輩で、北沢さんの後輩でもある。そういうこともご縁の一つかなと。だから、北沢さんの奥さんの後輩でもあるんですね。高校在学当時は、全然存じ上げなかったんですけど。

田口 お生まれは？

小沢 1956年です。メモを取るのは大変でしょうから、もしよろしければこれを差し上げます。ただ、ちょっと差し上げるつもりはなかったで、いい加減な部分があるかも分かりませんが。

田口 いいんです。全部文字起こしをして、それで見てもらいますから。

小沢 高校卒業して、大学は、京都へ行って、同志社大学に行きました。

田口 変な質問ですけど、なぜ関西に行ったんですか。

小沢 そうですよ。理由はいくつかあるのです。一つは、多感な青春時代は親と一緒にいないほうがいと自分で思ったんですね。それからもう一つは京都に対する憧れがあって、東京は東京で面白いまちだと思ったんですけど、京都のほうが学生にはふさわしい面白いまちかなというふうに思ったのが2点目ですね。まず、親元を離れたい。京都が面白そう。他の都市っていうか、大学も少しは考えたんですけど。それが主なところですかね。あと歴史が好きだったっていうことですかね。

田口 歴史ね。

小沢 はい。どこのまちに行ったって歴史はあるんですけど。大学4年終わって、終わる前に当然、4年で終われそうだったので、就職のことを考えたわけですけど、仕事をするなら関西より関東かなと思って、実は私、同志社大学のときは文学部社会学科で新聞学。ニューズペーパーですね。

田村 ジャーナリストになるやつ。

小沢 そう。多くの友達はジャーナリストに憧れて、あるいは、マスコミに何か希望を持って入ってきて、失望して卒業すると。だからマスコミに行った人間は意外と少ないですね。

田口 たまたま、うちの次女が上智大の新聞学科ですね。

小沢 今でも新聞学科っていうんですか。

田口 そうです。今でも新聞学科。

小沢 そうですか。

田口 だって、新聞って、中国語でニュースってことでしょ？

小沢 そうですね。

田口 今、旅行会社に勤めて、今、ニューヨークに行ってます。

小沢 そうですか。

田口 全然関係ない話で恐縮です。

小沢 だから、私の同級生も旅行会社もいるし、いろいろです。マスコミそのものは逆に、それほど多くはない。田口さんは市役所、昭和 53 年入庁でしたっけ？

田口 そうです。

小沢 だから、田口さんが入られるちょっと前の都市計画学会賞を取った頃の横浜のまちづくりに魅力を感じたというか、そういうのもあり、マスコミも受けたんですけど、マスコミでなければ自治体とかそういう所かなと思って受験したら運よく入ってしまっって、79 年の 4 月から市の職員になりました。ご存じのように、最初は神奈川区役所。

田口 そうですよね。

小沢 そこで田口さんに会った。だから田口さんが当時、区の魅力づくりをやってらっしゃって、神奈川区の魅力づくりということでしたっけ。

田口 そうです。

小沢 それで多分、確か田口さんと初めてお話ししたのが神奈川区役所の庁舎内だったかなと思いますけど、その頃、関内のほうでいろいろやってた都市デザインっていうのが、神奈川区でも展開されるのかと思って非常に興味深くお聞きした覚えがあって、その後、まち研とかなんかも。そこで田村さんにもお会いできて、あの頃、まち研って勉強会だと必ず 2 次会に行っった。10 人かそこらで、もうちょっといましたかね。わいわい飲んでるとか。

田口 まち研に実際に参加し始めたのは、その年でしたっけ？

小沢 何年か忘れちゃったけど、神奈川区役所にいる頃ですね。

田村 僕は神奈川区民ですから。昭和 43 年からだから。

小沢 そのとき、田村さんに「実は私の父が旧制静岡高校出身で」という話をしたら全く同じ反応をされて、「先輩じゃないか」と。それで多分、小沢という存在を覚えていただいたんだと思うんですけど。

田口 田村さん自身からね。

小沢 はい。静岡つながりで。

田口 じゃあ明さん、知ってるわけか。

田村 でも、絶対、ものすごくうれしかったと思いますよ。明はね。先輩だってというのは、何かにつけて先輩が登場すると、それをうれしそうにみんなに報告してたけど、小沢さんの話までは、具体的に小沢さんがどういう人かっていうのが出てこないから、それ話題にならなかったけど、そういう話ありますよね。そうですか。それはそれは。

田口 それで、神奈川区役所の次がどこでしたっけ？

小沢 市民局の広報課なんですね。機構改革で、ごちゃごちゃ名前が変わりましたが、覚えたのは、そのときに職場が教文センターにありまして、そのとき偶然だったのかな。田村さんが職場の近くに来て、そのときはもうご退職されてたのかな。ちょっとよく覚えてませんが。

田口 立ち寄ったんだ？

小沢 広報課の中の一係として広報センターっていうのがあって、教文センター、前川國男さん設計の建物の地下でこの仕事をしてました。主な担当は『市民グラフヨコハマ』という。今はそんなのはやらないんですけど、このぐらいの大きな大判のグラフ誌って、昔、アサヒグラフとか、毎日グラフとか。

田村 あのグラフか。

田口 あった。大判グラフね。

小沢 『市民グラフヨコハマ』っていうのがあって。

田口 あれ、今、雑誌があるじゃないですか。

小沢 『季刊誌「横濱」』ね。

田口 あれはその流れなんですか。

小沢 流れは流れです。だからその市民グラフを廃刊するときも、当時の流れなんでしょうね。直営でこんなのをやってる必要がないと。民間出版社に任せりゃいいんだと。だけど、企画には参加して共同編集だっということでも今でも出てますけどね。だから私が市役所に入ったか、入らないかの頃のアーバンデザイン特集とかっていうのもやったかと思うんですよ。

小沢 都心プロムナード、サインと絵タイルだったかと思います。当時、飛鳥田市政で、また、まちの土着的な魅力というか、そういうものを探るっていう意味でも、なかなか面白い仕事を先輩たちは残してくれたんですよ。私もその担当になって、季刊誌で年に4回。それを先輩と、最初のうちは仕事を勉強させてもらって、2年目ぐらいから年に4回出るうちの2号を別の担当が、2号を私がやるというような役割分担ができてきて、それでネタ探しではないですけど、あるいは、自分が思いついたことの企画を、具体的な雑誌編集に耐えうるネタがあるかどうかみたいなことで、庁内、あちこちぶらぶらしてたんですが、そのとき、たまたまかどうかわかりませんが、続けてデザイン室に相談に行ったネタが結実した。あるいは、そのネタの一翼を担う部分をデザイン室からアイデアなり、あるいは、実例なりをいただいたということがありました。

田口 歴史のやつとか？

小沢 そうですね。具体的にいいますと小説。小説による横浜っていう。

田口 ありますよね。あれ結構、いいですよ。

小沢 覚えていただいていますか。

田口 うん。あれは、すごくいいですよ。

小沢 ありがとうございます。

田口 すごくいいんだけど、あれ現物が手に入らないんだよね。

小沢 そうなんですか。

田口 僕、あれを読みたいとずっと思ってて、どこにもなくて、『かんかん虫』。現物を読みたいとずっと何年も。

小沢 『かんかん虫』の現物をですか。

田口 うん。あれないんだよね。

小沢 そうですか。吉川英治でしょ？

田口 うん。だから吉川英治特集。

小沢 全集とかに。

田口 全集に載ってます？

小沢 いや、分からないです。そこまでフォローしてないですね。

田口 だから、あそこに行くつかいい本が。

小沢 紹介されてるから、それを。

田口 これ読みたいなっていう。

小沢 ちょうど、みなとみらいにつながる話。

田口 そう。それが全部、図書館でそろっていることが意外とないんですよ。

小沢 それからスポーツでもそうですね。ネタをいただきましたね。それから、その後。歴史的建造物の特集、洋風のね。やりたくなくて私自身が。当時、北沢さんにとか相談して、他の人にも相談しましたが、それで結構、デザイン室の、そういう活動に取材かたがたのめり込ませていただいて、一緒に日本火災、本社に行ったりですね。あるいは、ライトアップですね。次の年からデザイン室に事務職を増やすことになったということで、その流れで私はデザイン室に異動になりました。

田口 係員としてですか。

小沢 そうですね。

小沢 神奈川区役所が79年から。4年後、83年に市民局へ、それから4年、87年ですね。それから4年間、お世話になりました。都市デザイン室にはですね。そこで係長試験に受かって。

田口 そうか。それで、旭区役所？

小沢 そうですね。それまで都市デザイン室の職員は田口さんもそうですけど、私が横浜市に入ったばかりのときって、ほとんど建築職だけですよ？

田口 そう。

田村 そうか。

小沢 だから、職种的にはそういう所だと思ってたんです。専門職集団がいるっていうのが横浜の都市デザインチームの特徴であると。

田口 事務的なところは企画課にお願いしていた。

小沢 やってもらったんですよ。隣のね。

田口 そう。

田村 なるほど。

小沢 4年で、一応、係長試験も受かったんで、その後、旭区役所。それから市民局、それから企画局と、教育委員会とか、何とか係長時代をすごしまして、課長になって当時、都市経営局という所の課長になって、その後、都市デザイン室市長になりました。

田口 都市経営局って、これは中田市長時代？

小沢 中田時代ですね。平成15年だったと思います。

田村 室長って、こんな話聞くのあれですけど、室長っていうのは部長？

小沢 課長です。

田村 部長レベルの室もあるわけでしょ？

小沢 あります。

田村 あるんでしょ？

小沢 普通、何とか室っていうと室長は部長なんですけど、デザイン室は昔からの伝統で課長がそのまま室長になるということなんです。

田口 デザイン室に行ったのが2004年ですね？

小沢 はい。それから3年間ですね。田口さんもデザイン室を出られた後、新本牧とかで仕事されてましたけど、建築職の人って私から見ると、そんな遠くに行かないんですよ。デザイン室から。デザイン室の仕事が見れる、意識する。ところが私は事務屋なんで、どこへでも行っちゃうわけですね。だから区役所とか行くと、自分がデザイン室でやってた仕事のことは、もちろん、忘れませんが、それが話題になる環境ではない所に行っちゃうわけですよ。87年に私がデザイン室に異動してきた当時、西脇室長の時代でしたけど、8人のうちの1人が事務屋でもいいかもしれない、という感じだったんですが、係長とか室長に事務職がなるということは、これまたあり得ない話だと思ってた。

だから私は、その市民局だとか、企画局だとかいたわけですけど、そういう所をうろろしながら市役所のキャリアを積んでいくっていうか、あちこち行くんだろうなと思ったんですけど、都市経営局っていうのも想定内の話で、政策課っていう所の担当課長になったんですけど、担当分野というのは教育、福祉、経済とかそういうところであって、都市計画局の担当にはしてもらえないんですね。どういうことかというのと、政策局って全部の市役所の局を見ます。政策課って

いう所は当時、4人か5人、担当の課長っていうのがいたんですけど、局別の担当で行くと、区はともかく局でいくと、私は、いわゆる、ソフトな市民局とか、教育委員会であるとか、福祉であるとか、経済だとか、そういう事務職系の局を担当させてもらえるんですけど、都市計画局の担当っていうのは技術屋さんがやるんですよ。当然のように、自分も口出ししたいなとか思いつつも担当ではないわけですね。

田村 でも、デザイン室に異動になったときのお気持ちっていうのはどんな。つまり、ここは行きたかったなとか。

小沢 それは若い頃の話ですか。

田村 うん。

小沢 行きたかったです。関わりたかったです。

田村 そうですか。

小沢 大学のときに市役所に入りたいなと思ったきっかけの一つは、そういうアーバンデザイン活動でもありましたし。

田村 そういうアピールはどっかでされてた？

小沢 私は広報課の担当者として都市デザイン室の人と一緒に仕事をしてるうちに、自分自身が興味があるっていうのは、もう分かりますからね。お互いに。

田村 ある種のアピールが通じたみたいなの？

小沢 通じたところはありませんね。それはそれで、人事ですから所定の手続きがあって、紆余曲折あったにしても、そういう結果となり良かったです。

田村 アピール力があつたっていうことですよ？ もう少しいうとね。

小沢 そうかもしれないですね。下手を踏まなくて良かったなというのはありますが。

田村 でも、自分の思ってた所に行けるっていうのはね。

小沢 そう。それで、「おまえはずるい」ってよくいわれました。当時。面白そうな楽しそうな仕事で、自分が行きたい所にずっと行ってるじゃないかと。入って以来。広報っていうのも、事務屋にしてみれば、結構、人気職場ではあったんですね。

田村 そうか。

小沢 だけど、楽しく仕事をさせていただいたと同時に、今でいう働き方改革の逆をいくような長時間労働をものともせずにやりました。

田口 室長になったときには、どういう説明だったんですか。

小沢 二通り説明がありました。一つは異動する前の職場の上司であったりとか、行ってからの関係者とかの話。デザイン室の今の課題は景観法対策だ、と。景観法ができたから、その景観法に合わせた対応を何かしていかなくやいかん。例えば、条例をつくるとか。国の法律に合わせた制度的なやり方。法律の仕組みに合ったやり方を、どういうふうに構築するのかがデザイン室の今の課題であるということをいわれましたね。ところが私はそのとき恥ずかしながら景観法って、あまりよく知らなかったんです。当時、デザイン室というか、都市計画局の課題は、みなとみらい線が通った直後で、沿線の都心部にマンションが次々建つわけですよ。特に関内地区でそれが顕著で景観を乱しているということでした。

田口 その時期ね。

小沢 高さ 31 メートルの制限がかつてはあったのですが、それを超えるマンションが当たり前のようになってきていました。

田口 (制限を) やめちゃったからね。

小沢 やめちゃいましたからね。高い建物がどんどん建つわけですよ。それは都心部のまちづくりにとって非常にまずいっていうのは、いろんな意味でいわれたけど、景観的にまずいと。これは何とかしなきゃと。とかいいながら、みなとみらいにもどんどん建ってるし、それは一部、誘導していた節はあるわけですけど、それはそれとして。だから、景観法対応をしつつ関内地区の超高層マンション林立を景観的になんとかするような対応をする、そういうことだっていわれましたね。

同時に、国吉さんが部長になったんですね。専門職の。それは同時です。つまり、国吉さんが部長になって専門職になる。そうすると室長職が空いちゃう。そこに誰を入れるんだということで、結果的にまた私になったんです。

田村 面白い。いい話ですね。

小沢 人によっては、おまえは事務屋なんだから、まして事務屋の法律対応とか、そういうことだったら事務屋のまさに出番じゃないかと。おまえ頑張りというふうにいる人もいましたし、おまえなんかにはできるのかよと。デザイン室の室長の仕事。つまり歴代、岩崎さんから始まって建築職色以外の人が就いたことはないんですよ。室長職にね。

田口 (その何年か前に、当時室長だった) 北沢さんが東大に転出してしまった。

小沢 そうです。北沢さんの後が岸田さん。岸田さんの後が守さん。守さんの後が国吉さん。そして私ですね。

田口 そうか。

小沢 9人目になると思いますけど。

田口 なるほどね。そうすると、ちょうど景観法になって景観条例をつくったんですよね？

小沢 そうです。但し、条例をつくらないっていう選択肢もあったんです。国の決めた法律の枠内でうまくやればいいじゃないかというものもありました。

田口 そうでしょうね。

小沢 ただ、それだと埋没しちゃう恐れもあり、この際、横浜独自のものをつくるのは、横浜の都市デザインの伝統の、横浜らしいまちづくりの独自性をアピールすることにもなるじゃないかということ。

田村 そのときには、国吉さんからのアピールはあるんですか。

小沢 具体的な業務指示？

田村 彼自身が持っている法律的な知識みたいなものも当然、持っておられるはずだから、ないのかもしれないけど、あるはずだから、それなりの経験を積んだ方だから、そういう方が小沢さんにこうだねとか、何か意見をいうというような意味ですけども。

小沢 条例をつくることに熱心だったのは、当時の木下真男局長です。木下さんは、局長になられたばかりだったんですけど。

田村 でも、局長になられた立場からいえば、そういうふうになんとか後押しもしてあげたいという気持ちもおありだった？

小沢 相当、ご熱心だったですよ。木下さん、ご自身が、管理者の立場じゃなくて、1人のまちづくりをやる人というか、建築屋さんというか。

田口 これが割と大きいポイントだなと思うのです。仮の話だけど、つくらないで、当然、やることはできるだろうし、ただ、大きな流れとしては、やはり都市デザインというのは、かつての都市美審議会がそうであったように、やはり制度をもった方がいいという発想があったからですか。

小沢 デザイン室がですか。

田口 うん。

小沢 そこは後に議論になるところでして、つくっていく最中で、結構、難しい問題だったです。というのは、後ほど見ていただければいいんですけど、当時、できたばかりの条例について書いた雑誌があるんで、これがいわば横浜市の公式見解に近い実務者としての。

田口 『造形』ね。

小沢 これを読んでいただければ、当時のほぼ公式見解です。

田口 簡単にいうと、どういうことなんですか。やはり、その制度を持つことが力になるという理解じゃないと、もし邪魔だったらつくらないから。

小沢 そこなんですよ。まずその問いにお答えしますと、横浜市として独自の条例は当然、持つべき。これはほとんど反対する人は市の内部でもいないし、議会でも承認されて。ところが、どのように持つか、あるいは、市役所の中のどのセクションが持つか。これはちょっと議論がありました。

田口 そうでしょうね。

小沢 分かりやすい話をしてしまえば、横浜市全体の景観について重要な役割を果たすべき都市デザイン室は、今の問題に対して対応する。そのために条例をつくる。横浜の都市景観、景観づくりの伝統を生かしたものをつくる。これはデザイン室でやろうと。これはほぼ、そういう流れで来てるわけですけど、つくった物をどこが所管するんだと。あるいは、どういう役割分担で景観行政をやるんだと。これは議論がありました。後でつながる話ですけど、ある程度先まで申し上げちゃいますと、私はデザイン室で条例にもとづく業務を持つことには疑問を持ってました。後にやっと実現するんですが、景観調整課と都市デザイン室は分けるべきだと。

田口 分かれましたよね？

小沢 実際、その数年後に分けた。当時、中野さんが室長だったんですけど、その頃、私が考えていたこれがやっと実現しましたよというふうにしてくれたんで、私がこういうふうにするべきだって書き残したものを大事にしてくれてたんだらうなど。そんな細かい話はしてないですけど。どういうことかっていうと、後々になって自分の頭の中がクリアになってきたという部分があるんですけど、田村さんも書いておられるんですけど、禁止とか規制をするのであれば、その数値とかね。形になるもので。これは法律でできると。ところが、広義のまちづくりというのは法律じゃできないよということを、この本なんかでも述べておられますけど、デザイン室は、何か案件があったときに、そこに物差しを当てて、こっちからこっちはいい、こっちからこっちは駄目よと、こういう仕事をするべきではないと、簡単にいっちゃうとそういうことを思ってた。

だから運用するのは別の所がやると。全体の仕組みも、法律的な仕組みと、大きな方向性。こ



ういうふうに景観をつくっていきましょうよっていうのを役割分担して、制度の仕組みは景観条例。法律なり条例。こういうふうにつくっていきましょうよっていう大きな考え方はビジョン。その2本をつくったんです。

田口 景観ビジョン？

小沢 景観ビジョンって今もあります。今度、改定されますけど、それは当時、東大に、ついこの間までいらっしゃった、西村幸夫先生に相談しながら、あるいは、コンサルタントとしてはAURに元いた人。当時はAURじゃなかったですけど、協力してもらいながら、それはそれでつくれたかなと思うんで、そこで私のデザイン室としての大きな仕事は一段落して、3年でそれが終わったなっていう感じだったです。ここに概略図みたいなのがあるんですけど、これをちょっと見ていただきますとね。44ページ。

仕組みをちょっと補足させていただきますと、左側に横浜市の地図みたいなのがあって、景観法の景観計画と、景観ルールによって、基本的な景観の水準って書いてあるんですけど、それはこのBの景観推進地区っていうですね。要するに法律だけでやってるとすると、このBだけやるわけです。景観法に、景観計画を決めることができるかというようなことを行って、そこで、基本的な景観ルールとして建物の形や、高さ等の定量的規定をしていくと。だからさっき法律だけでもできるっていうのは、要するに、このBだけでやるっていうことです。条例っていうのは、このAの協議型景観推進地区。景観形成の協議制度。創造的なガイドラインっていうんですけど、魅力を向上させる定性的な基準を定めると。

これで例えば、にぎわいの持続であるとか、歴史性の継続であるとか、こういったことを目指して協議をしましょうという仕組みをつくりました。だから、そこでは具体的なものは定めない。協議をすることだけを定める。それを特徴とする条例をつくったんです。Cのほうデザイン計画っていうのがあって、AやBっていうのは特定の地区なんですね。みなとみらいなら、みなとみらい。Cっていうのは、全市的に基本計画で、これは横浜全体をこういうふうにしていきましょうよと。さらにその下っていいですか、下だか上だか、概念上は別なんですけど、横浜市景観ビジョンっていうのがあって、望ましい景観とはこういうものなんですよという、一応、これをそろえたんです。こういうのが仕組みです。

田口 結構、複雑ですね？

小沢 そうです。自分たちでも、この複雑な仕組みを構築して人に説明するのは大変だったです。この各地区っていうのが第一の考えだったんです。

小沢 なるほど。この仕組みをつくったんですけど、その地区ごとの担当、例えば、関内地区はどうある。関内地区での景観計画をどういうふう運用するか。景観計画をつくって、例えば、高さをどうするか、色をどうするか、色はマンセル値っていう数値で表せますから。そういうようなところをデザイン室がやるのか、それとも、当時、エリア担当っていったんですけどね。都心部担当であり、あるいは、新横浜担当であり、面で抑える担当があるじゃないですか。都市の計画局にね。そこがやるのかっていうのが一大議論。仕組みそのものをつくる、それが大変なんです。

田口 そうでしょうね。

小沢 だから、そういうエリアを持っている担当者のほうが数としては圧倒的に多いですから、多勢に無勢なんですよ。これはちょっとつかつていうか、予想外に厳しかったのは、景観でも何でも、条例なり仕組みを役所としてつくるときに、庁内の作業のための会議だとか何とかっていっぱいやるんですけど、そこになると、ある意味、デザイン室と他の課って対等になっちゃうんですね。対等になるばかりか、つくらせていただく立場になっちゃうんで、要するに言いたい放題いわれちゃう。そこを突破するのが大変だったですよ。だから景観問題が起こったら、デザイン室は横浜市全部のどこでも行けというぐらいの主張をされるわけですね。

田口 どこでも来いと？

小沢 だから、例えば、泉区であろうが、鶴見区であろうが、景観問題が起こったらそこへ飛んでいくのはデザイン室だと。そこで、地区ごとの景観計画をつくるなり何なりするのをやれと。自分たちは、再開発をやるということを主張される。

田口 うん。だから、どうしたのかなと思って。大変なことになるんじゃないかと。

小沢 いや、大変。

田村 それから、この四つの仕組みってというのは、いってみれば相互に矛盾が起きないという前提がどこかにあるわけ？

小沢 それは、仕組み上は大丈夫です。ただ、それがうまく動くかどうかっていうのは、また別の話で、それは後で言いますけど。

田口 でも、そのときにその主張は分かりましたと。全部やりますと。当然、人数増やしてくださいという選択もあり得たわけですよ？

小沢 あり得ましたけど、それだけはすまいと思ったんです。そこでデザイン室が、例えば、30人、40人の、いわゆる開発部並みの人数を抱えたら、これはデザイン室ではないと。それは真っ先に分かったというか、そういう議論をすること自体がデザイン室ではないというのが信念みたいにありましてね。

田口 そのときに小沢さんが室長として考えたデザイン室。横浜の都市デザイン活動のやり方で一つのシナリオがあったわけですよ？

小沢 そうですね。でも、それは多くの先輩がいますから。田口さんを始めとする。その流れの中でいけば、そのような考え方が当然になる。

田口 それは言葉であえていおうとすると、特定の場所でのルーティンを持たないっていうことですか。

小沢 そうです。だから関内は第一番目の地区だったし、デザイン室の長年の蓄積もあるから、関内は自分たちでつくるけど、できちゃったらエリア担当さんに渡すよ。

田口 山手は？。

小沢 当時、離しました。エリアはもう持ちませんと。

田口 なるほどね。

小沢 ちょっと分かりにくい話かもしれませんが、横浜市全域で、あるまちづくり的なことをしようとしたら、市民に対して、あるいは、事業者さんに対して、何局の何課に相談に行きなさいってあるわけですね。その枠内に入らないということなわけですね。エリア担当が受けて、非常に重要な問題、手に負えない問題、複数で対応しなきゃいけない問題、景観上、横浜市を揺るがすような問題、そういうのにはデザイン室は関わらましよう。

田口 エリア担当を通じてね？

小沢 そうですね。ということに、やっとなんとか落ち着いたかなと。

田口 エリア担当でずっと抱えてやっちゃってもいいわけでしょ？

小沢 もちろん。だから当時も開発課で完結した案件もいっぱいありますよね？ デザイン室に相談、わざわざ持ち込まれなくても。

田口 あれは僕が関わってた当時、都市デザインと開発課の間の何年間に亘る攻防戦って実には大変だったんですよ。

小沢 そうなんでしょうね。だから同じようなことで、条例をつくるときにそれをきっかけに再現したというか、何度もくぐらなきゃいけないところだったと思いますけど。

田口 なるほど。そうすると大きな流れは一貫してるんだな。

小沢 それは私はずっと意識をしてたので、国吉さんも、もちろん、そういうことだったので、その部分は多勢に無勢ながら何とかしのいで。

田口 そうすると景観条例がらみの話っていうのは、そういう切り分けの中で収めた？ 最終的には課を離れたということで、流れは説明できるっていう感じかな。

小沢 もう一つ加えさせていただきますと、ちょっと鬼っ子が現れました。それが屋外広告物。当時、環境創造局、元緑政局の緑政課という所がやってたんですね。屋外広告物って、全国どこだって屋外広告物条例があって規制をやってるんですけど、これが焦点になっちゃったんで、私も結構、調べたんですけど、道路局系がやってる所もある。建築がやってる所もありました。土木系もあったかもしれません。それからうちみたいに環境系っていいですか。要するに役所の正統的な役割分担の中だと、うまく収まらない仕事ではあったんですね。結構、ややこしい問題があるわけですよ。これを結局、引き受けざるを得なくなって、苦渋の選択だったんです。だけど受けたからには、いつかは整理し直して離す。それが景観調整課に持っていく話として、私は整理をした。今はしょうがない。いろんな力関係の下に引き受けざるを得ないけれども、これを、その他の定型的な景観業務も含めて景観調整課とデザイン室は分けるべきだと。それは、中野室長の時代になってできたんですけど。だからデザイン室として何か大事にしたかった部分っていうのはありました。簡単にいっちゃうと仕事としてはルーティンを抱えないこと。

田口 ですよ。

小沢 まさに田村さんがおっしゃってるように、数字とかで規制することは、それはそれで大事な要素ではあるけど、まちづくりで大事なものは、そうではないと。

田口 結果として都市美審を抱えて、ずっと今も抱えている形になっているじゃないですか。都市美審は使いようによっては意味があるから、それは抱えていこうっていうことでいいんですね？

小沢 都市美審の性格は、そこで一変しました。条例化で。

田口 景観条例で問題があるやつは都市美審にかかる？

小沢 例えば、そういうことです。あるいは、先手を打って提言をもらうとかいうのはあるかもしれませんが、この図にはないんですけど、こういう仕組みの中に組み込まれて。

田口 そうすると、どう役割が一変したんですか。都市美審は？

小沢 それ以前はその時々都市デザイン室が問題意識を持つててることをばんと出せたわけですね。

田口 そうですね。都市デザイン条例をつくるとか、つくらないとか、なんだとか。港の景観だとかも、やったりしたのですよ。

小沢 はい。金と権限のないデザイン室にしてみれば、いいオーソライズだね。そういうふうに使ってましたでしょ？ 田口さんも意識的には。

田口 僕はその時代を知らないんですけど、後から記録を見ると。

小沢 そうか。いらっしゃらなかったんですね。

田口 巧く使ってるなっていうふうに。でも、そもそも都市美審に、そんなオーソライズ権限があるのかと思いましたが。

小沢 その権限っていうのは見せかけの権限でもありますからね。そこはうまくやれば。それはあったかと思えます。

田口 そうか、なるほど。ということで整理されて、そういうふうに整理されて、あとは、小沢さんが関与されてない部分になるのかもしれないけど、その話と同時に創造都市の話が出てくるのでないですか。

小沢 はい。出ました。

田口 創造都市の話とデザイン室は、それを議論されたときは、どう切り分けされたのですか。

小沢 条例について、創造都市はノータッチです。創造推進課はできてたかと思えますけど。

田口 創造都市って何となくやってることが、大昔の都市デザイン室みたいな感じもしないでもなくて、外から見てるだけでいうとね。

小沢 そうですか。

田口 そうすると創造都市の中にデザイン室が包含されてもおかしくないのかな、と思えますが。

小沢 そういう議論もありましたよ。

田口 やはり？

小沢 はい。創造都市が事業本部っていうのになったんですね。

田口 なってましたよね。

小沢 局でもなく。割とそのへん、重要課題は本部をつくってやるっていうのは当時の、いってみれば、やはりだったので、それはそれでいいんですけど、その本部の中に入っちゃえよと。入っちゃえばいいじゃないかっていってる人いましたけど、私はあまり乗り気じゃなかったですね。気持ちだけ及ばせていただく。実際、そんなになかったんですけど。

田口 実際問題として、この制度下で、デザイン活動は何をどうやってたんですか。この時代の中で。

小沢 活動？ そう。私、実は田口さんのお手紙とか質問項目で、デザイン活動って出てくるけど、田口さんがデザイン活動をどういうふうにとらえてらっしゃるのかなっていうことを、お聞きしながらお話ししたほうがいいかなと思ったんですけど。

田口 そうですよ。

小沢 デザイン室でやってる活動がデザイン活動ですか。

田口 それは極めて難しいでしょうね。結局、大昔の田村さんがいったときの都市デザインっていうのは、田村さんは最後の頃に都市デザインを3本柱の一つみたいにいってるけど、僕は全く違うと思っていて、実際は二本建てでプロジェクトとコントロールしかない。それで、必要なとき、調味料も必要だし、田村さんの美学で、やはり最後もしっかりしたものにしないと、今ま

でやったプロジェクト、コントロールの意味がなくなっちゃう。だから、そういう役割で都市デザインは使われてた。だから、都市デザインが独立して何かをけん引することは、僕はなかったと思うんですよね。僕は逆にいうと、なくてそれでいいと思う。だから、プロジェクトとコントロールが二本柱であって、それを成立させるサポート役でいいと。

小沢 なるほどね。対等じゃないわけですね。

田口 全然、対等じゃない。

小沢 なるほど。そうか。

田口 それが、今までのいろんなものを見てると、鈴木先生が書かれている、北沢猛さんの歴史みたいところがありますね。それで、北沢猛、彼がやろうとしてたのは、どちらかという都市デザインがけん引すると。それを主導し、それを主体的にやっていくと。だから一番は、歴史を生かしたまちづくりのように、それまで肉薄できなかった港湾の聖域であった港に食い込んでいく。僕はその二つなんじゃないかと思ったんですよね。あと、郊外の話はあるけど、それは付け足しで、あってもなくてもいいじゃないか。だから、それをやるために、自分でどんどん引っ張って主導していった。その象徴が創造都市である、と僕は見たんです。

小沢 北沢さん視点でいえば、そのとおりだと思います。北沢さんは自分のポジションを、恐らく田村さんに近い所にイメージしてたんだと思います。だけど、田口さんのさっきの理解は違いますよね？

田口 アーバンデザインというものは、そういう言い方すると自分自身が都市デザイン出身で変だけど、せいぜいそんなものでないか、と思っている。

小沢 分かります。

田村 面白いね。

小沢 面白いかどうかあれなんですけど、要するに私も、ものすごい悩んだんですよ。当時。久しぶりにデザイン室に行ったでしょ？ だから、はっきりいう人もいれば、そうでない人もいましたけど、要するに都市計画なり、建築なりの専門家でも何でもないおまえに何ができるんだというふうに思ってる人は、ほとんど全員ですよ。

田口 いたでしょうね。

小沢 だけど、小沢なりに頑張ってるねってしてくれる人もいるけど。

田口 でも、あなたがたは何やるの？っていうところもあるのですよね。

小沢 それはともかくね。北沢さんは、いろいろお話しされ、私にね。室長になる直前ぐらいから。亡くなったときは、私、中区に異動しちゃってましたけど、いろいろ一対一とかでお話しされるときは、要するに国吉さんがいわないようなことをいってくれるわけですよ。それはどういうことかという、デザイン室長というのは、例えば、市庁舎が立つわけですよ？ こういうふうに100メートル級のものが建つ。あるいは、北仲北地区で、森ビルがどのくらいのものを建てたがるか。だけど、その場所にはどれだけの容積のもの、どれだけの高さのものが横浜の都心部の中で必要なのか。あるいは、許すべきなのか。そこから考えなきゃなんないと。それは単に形の話じゃなくて、横浜の都心部、全域があって初めて都心があるわけですけど、その中で、どういうまちをつくるのかっていうのを考えて、それを容積なり、高さなりの形で、ここはこう。事業者がここをやりたい。ここは駄目だけど、その代わりにこっちでやらせてみたいなことを考えるのが、都市デザイン室長だと。

田口 そうでしょうね。だから両方入っているのですよ。プロジェクトのコントロールを主導してやる。

小沢 さっきの田村さんのご説明でいくと、後者のほう。味付けじゃなくてね。だから、それを北沢さんは志向してたし、そのモデルになったのが田村さんのお仕事だったんだろうなと思うし、そういうことをいわれても、僕に、それやれっていうんですかねみたいな感じではあったんですけど、「小沢君もまだデザイン室長としては修行中だから」と現実と目指すところを伝えてくれました。

田口 でも、それってデザイン室ではないんだよな。いいんだと思うけど。だから、もっと上の全部を、いわゆるプロジェクトコントロールを自らデザイン室が所管してやるぐらいの話だから。

小沢 そう。だから、デザイン室はそのぐらいの気概を持ってっていう話であるのと同時に、それは私に対する個人的な励ましではあったんだろうとは思いますが。

田口 でも、第二の田村明になれっていうことだからな。

小沢 いや。それは北沢さんが自分の思いを私に伝えてるわけですよ。俺の分身になって頑張れと。そのとき、彼は職員じゃないわけですから。参与ではあっても。だから、今、まさにデザイン室の仕事じゃないっておっしゃいましたけど、デザイン室の室長は課長、課ですから、一課長なんですよ。課長より偉い人がいっぱいいるじゃないですか。市役所にね。だから田村さんは企画調整局長であり、技監でいらっしゃいましたから、そのポジションから見れば都市デザインっていうことを、そういうふうを考えることは可能だったと思います。うー、デザイン室の一メンバー、仮にチーフであったとしても、責任者であったとしても、デザイン室の一員だと思えば単なる一課の中の職員ですよ。だけど、デザイン活動っておっしゃると、デザイン室活動なのか、オール横浜のデザイン活動なのかっていうことでは、意味合いが全然違っちゃう。

田口 結局、すごく難しい立場に置かれている。つまり、プロジェクトのコントロールらしきものはあったとしても、ばらばらにやられているだろうし、その中でデザイン室が、デザイン的な要素をどう組み込むかは、そんなに簡単にできるものでもない。他の部署に先んじて市の幹部から相談や指示を受けるわけでもない。というのも、周りが全然期待しないわけで、そういう中で結構、大変だろうなと思う。だから最低限、制度は持つという感覚はあったとして。でも、さっき面白いなと思ったのは、小沢さんが、そうはいつでもルーティンを持たないというようなことは、これは極めて僕らが昔にやっていた時代と変わらないから。そうすると、どうやって都市デザイン室というセクションが、他のたくさんいる部署の人たちから、どう期待され、どう連携するのかが問われる。

小沢 なるのかなってことですか。

田口 期待されるようになるのかなと。

小沢 そう。それで、私、キャリアの説明に時間かけたのは、ここから先の話にも関係するんですけど、デザイン室を遠くから見る。直接仕事に関わらないけど、こんな仕事してるんだなって役所の中で見てると、いろいろ気が付くところがあるんです。何が強みなんだと。金、予算はない、法律的な権限はない、庁内のパワーバランスみたいところでいうと、いわゆる伝統的な力は何もないわけですよ。実績と個人のセンスの集合体みたいなもの。あるいは、田村さんがいらしたときは、田村さんのいろんな戦略の中での位置付けで、デザイン室、こうやれっていうところが出てくるから、それはそれでいいと思うんですけど、田村さん、いらっしゃらなくなっからのデザイン室だから、1980年代の後半ぐらいに私が入ったあたりで何が強みかなっていうと、私から見ると一番重要だったのは、職員個々に技術力があるっていうことが一つあるんですね。

もう一つは、ちょっと矛盾した話かもしれませんが、権限があるセクションと近いところにいるっていうことなんです。つまり、岩崎駿介さんの本にも明快に書いてある。今では、もう逆に否定されちゃう、え？っていう感じですけど、要するに建築確認行政とタイアップして、デザイン室の調整を受けなければ、当然、下ろすべき確認申請なり何なりが下りないというやり方をしてるんだというふうに明快に書いてあるんでびっくりしちゃうんですけど、それでも多分、うまくいったし、逆に、なりふり構わずっていうか、そういう手段を講じて結果的に大事な都市

問題を解決していくというところにつながってきたので、それはそれで、その時代はよろしかったと思うんですけど、その後、行政手続法とかいう法律ができてたりして。

田口 それに、建築確認申請なんて、今、自治体がやってないですからね。

小沢 だから、そのへんの流れはここにも書いてあるんですけど、そうすると二つのことをいうんですけど、一つはさっき言ったように創造都市推進本部にいったら、都市計画局の開発指導とか、建築局の建築確認はともかく、建築許可と絡めて、あるいは、総合設計制度を使うとか、そういうことができなくなっちゃうんですよ。少なくともしづらくなる。

田口 そうでしょうね。

小沢 だから、同じ都市計画局の仲間、あるいは、建築許可業務。確認も広く含めてですけど、建築確認行政のネットワークの中で発揮できるポジションがなくなっちゃう。急にはなくならないかもしれないけど。

田口 そうですよ。

小沢 だから私は都市計画とか建築局じゃない、市民局だとか、教育委員会だとか、区役所から見ると、それがデザイン室のものすごい財産だと思ったわけですね。だから、建築許可を下ろす何とか課長とは、ツーカーの仲で、俗な言葉で恐縮ですけど。

田口 そう。つまり、相談を受ける立場なんですよ。

小沢 そうですね。裏でも相談をできるし、表でも何とか対策課長会みたいなのがあって、そのメンバーなわけですよ。係長会があって、そのメンバーなんですよ。そのネットワークから、あるいは、情報網から外れることは、ものすごい失われることになる。ということで、私は、一時的市長のお声掛けの事業本部に入るの絶対反対という考えでした。

田口 そうか。だから、今もそういう流れで今のデザイン室も動いているということですよ？

小沢 現状のこの評価は、今ちゃんとできないんで、そのことをしゃべるのはちょっと置いときますけど、もう一つ、今の話の流れで申し上げますと、そういう建築都市計画行政のネットワークの中で培ってきたポジショニングっていうのはあったかと思うんですけど、その中で条例を持つことの意味っていうのはあったんだろうと思いますね。デザイン室の位置付けは若干変わりますが、だから、どういうことかっていうと、典型的な例として岩崎さんが書かれたものの中で建築行政とタイアップしてっていうのがあったんですけど、柔軟な行政指導を行うと。それは田村さんも書かれてるんですけど、そのへんは行政手続法なりなんなりが、だんだん。あるいは、土地利用規制が効かなくなってくる、あるいは、緩んでくることのしわ寄せが、全部景観のほうに問題点として現れちゃったんで、いよいよ景観として、そこを抑えるしかないということで、デザイン室が中心になって景観法を対応、あるいは、その条例をつくるっていうことの意味があったんだろうと思います。

田口 そうか。ネットワークが機能しなくなる中で、条例でせき止めちゃおうということですか？

小沢 そう。都心部の31メートルが崩壊してきた。規制がちょっと緩んできたところを、景観の名の制度でせき止めちゃった。

田口 多分、田村さんの時代だって、そんなにうまくいった訳ではないと思う。常に情報がうまく流通してネットワークが機能していた訳でなく、田村さんが指示出したのは、非常に特殊な部分で指示を出すけど、そうじゃないもので、地域の中からピックアップしてくるのは、多分、国吉さん流のやり方でやるしかない。岩崎さん、どちらかという田村さんの指示でいろんなものをシステム化したのでないか、と僕は逆に見ます。

小沢 そうですか。

田口 そうじゃないような印象があるのだけど、岩崎さんが書いたものは別にして、具体的な歴史的事実を見ると、環境設計制度なんかも岩崎さんがつくったといわれてるけど、あれはどうも違って、田村さんの指示でつくられたようだ。岩崎さんがどの程度関わったかは不明です。岩崎さんが活動された案件は、大体、田村さんの指示によるものでないか。都市デザイン担当は、岩崎さんと国吉さんの二人に、西脇さんと北沢さんを加えた四人であったが、僕がよく覚えているのは、岩崎さんが、僕が市役所に入って職員を紹介するとき、国吉君は独立愚連隊だからねっていうふうに言っていた。彼は、僕の指揮下にはいません、と明快に言っていた。

小沢 そうですか。なるほどね。

田口 だから、国吉さんは自分でいろんな所に出て行って、自分で仕事を取ってきた。こんがらがった仕事を、じゃあ、私に関わって調整しましょうっていう感じで、いろんな局の間の調整や、地元が絡んだやつもやったりとか、自分でどんどんやってきましたよね。

小沢 独立で？

田口 うん。

小沢 らしいですね。

田村 「愚連」がついてなかったかもしれないですね。

田口 田村さんが実質いなくなって、僕が志向したのは、都心周辺区の都市デザイン活動として「区の魅力づくり」に代表されるように、区役所機能をより強化するために、区役所のための企画調整機能を都市デザイン室に持たせることだった。だからそれは、具体のプロジェクトを立ち上げ「区の重要事項要望」として特別の予算要求をしていく。そのために、区の調整係が区長の下で企画調整局の都市デザイン担当と協力しながら、企画調整機能を持ちながら、組織的に企画調整局と区役所と一緒にやっていく。そのことがもう一回、企画調整局と都市デザイン担当も存在意義をもつのでないか、と拘り何年かずっとやってたんだけど、簡単にはいかなかったですね。細郷市政の1982年に企画調整局は廃止された。やはり、そういう組織の流れは、これは都市デザインに相談してきなさいとか、これは都市デザインを含む関係セクションで協議しなさい、というのは役所機構論として、そんなに簡単にできるとは思えないから、何かの制度を持たないと難しいんだろうなと思った。でも都市美審だと、あれはあれで、事務局が用意した個別案件を審議してあまり踏み込まずに終わっちゃうから、具体の何かに常に引っ掛かるやつがないと困るだろうなっていうので、景観条例っていうのはそういうことも可能になるのかな、と思った。それで、都市デザイン室の変遷を見てて思ったんですけどね。

小沢 もう一つは人材の問題があるんです。田口さんがいらっしやった頃の、まさに専門職集団っていうのから、どんどんやせ細ってきたというか、国吉さん1人しかいなくなりました。私が若い頃、デザイン室に配属されたとき半々だったんですよ。西脇さんがいらっしやって。田口さんが転出した後に北沢さんがいて、西脇室長でしょ？ 北沢係長、国吉さんがいて、ミヤザワさんも半分そんな感じでやってたから。

田口 そう。宮沢さんは馬力あるからね。

小沢 馬力あるから。当時、私と一緒に異動してきたのが、アキモト、ナカノって、後に室長職を、続けてるんですけど、一般職の人数が増えたんですよ。私らは、まだ半々ぐらいの感じで一緒に仕事させていただいて、いろいろ教わったと。ところが、はっと気付くと、もう国吉さん1人しかいないわけですよ。だから、私はここで、ちょっとやせ細りだと感じました。上の人からもいわれたんですよ。ポスト国吉を考えるのも、おまえの仕事の一つだと。ちょうど私が在職中に国吉さんが60歳になって、その後も数年間デザイン室での活動が続いていたんですけどね。当時その件について考えて実行したことが二つあって、一つは専門職を、もう一回採用してくださいということ。カツラ君ってご存じですか。



田口 うん。桂有生君ね。(注：東京芸大建築学科卒で設計事務所を経て都市デザイン室に嘱託で採用され、後に試験を受けて正規職員となる)

小沢 彼は、そのときに入ったんですね。もう一つは、専門職を入れるにしてもデザイン室自体は人数増やせないし、1人、続いてもう一人っていう風に徐々に増えれば良いな、というもくろみもありました。結局、桂君しか入ってないですけど。あと全体の底上げをするために、職員を公募して、アーバンデザイナー養成講座っていうのを。

田口 やってみたいですね。

小沢 やったんですね。10回コースで。10回だったかな。そのくらいだった。

田口 資料を見ました。

小沢 見ました？

田口 うん。

小沢 どっちもやらなくなって残念なんですけど。その10回コースの1回目に田村さんに来ていただいて、お話ししていただいたりしたんですね。人材育成っていうのは本当、一朝一夕じゃないので、その後どうなったかっていう測定もなかなかしにくいんですけども。

田口 なるほどね。

小沢 そこは制度とは別の話ですけどね。

田村 そのへんの人材育成の話をお伺いしたいのですが、印象的な言い方ですけども、田村明は、随分、変人をたくさん取り入れた。要するに変人という言葉は適当でないかもしれないけども、良くいえばユニークで自分の専門性に対して自信を持った人たち、と捉えてもいいのかもしれない。割とそういう人たちを、たくさん明は採ったような感じ。岩崎さん始めとしてね。彼だって相当ユニークだから。でも、田口さんが聞いてるときに、その話をしたほうがいいかもしれないけど、そういう意味で現在に至るプロセスの中で、人材育成の前に、ユニークな人間を採るような仕組みは、今あるんですか。つまり、なるべく平凡な昔流のお役所的な人間を採ろうとする仕組みになっているのか。それとも、まだ昔の流れが少し残っているのか。どうでしょう。

小沢 田村さんが人を採られてた時代と全く体制も違いますし、仕組みも変わってるので、こいつ良さそうだからっていうことには、これは誰の力をもってしても無理だと思います。だから、私らもそれなりの仕組みをつくった上で公募をして、応募者の中から1人選んできると。ちゃんと選考委員会みたいなのもやってですね。そういった中でユニークな人間が採れないことはないと思うし、逆に田村さんの時代で、自分は専門職で引っ張られるほどではないけど一般職で応募してきたっていう、そういうユニークな人材はそれなりにはいるので、それは育てようかなっていう感じですね。前の市長のときなんか、ぼんぼん連れてきた人はいるんですけど、定着してないですね。

田村 前って、中田市長の時代にですか。

小沢 そうです。

田口 デザイン室にですか。

小沢 デザイン室じゃないですよ。もちろん。デザイン室以外の所にぼんぼん置かれた人はいますよね。いい例でいえば、信時正人(のぶときまさと)さんとかね。

田口 誰ですか。

小沢 信時さんってご存じないですか。

田口 知らない。

小沢 三菱商事から入ってこられて、温暖化対策事業本部長かなんかやられて、今は東大のまちづくり大学院の非常勤をやりながら。

田口 もう市は出たんですか。

小沢 私と同年ですから。市は出てらっしゃる。50歳ぐらいのときにこられたんじゃないですかね。あの人は。そうですね。これぞと思える人。それは直接か間接か分からないですけど、ユニークな専門性は確かに。その部分では実力はあってみたいいな人っていうのは、その後、なかなか入ってこれないですね。実際のところは。

田口 今は景観調整課と都市デザイン室は分かれているけど、実際は連携している？

小沢 今、どのようにやっているか、そこは分かりません。してないことはないんでしょうけどね。

田口 景観調整課で扱っている案件で問題があると、さっき言ったみたいにデザイン室が関与する？

小沢 そういう仕組みの趣旨に沿ってやってるっていう話は聞いたことありますけど、具体例は分かりません。きょうの午前中、今の室長に電話してデザイン協議とうまくいった例って何かあるの？って聞いたら、近々、景観ビジョンの改定を終えたら、事例集を出すというようなことはいってました。それで、さっきの創造都市の話ですけど、創造都市に私、行かないほうがいいと思った理由の一つは、さっき言った建築都市計画の権限のある部署のネットワークから外れちゃうことの懸念が一つと、もう一つの、創造都市は創造都市で仕事始めてましたけど、北沢さんが構想された創造都市っていうのは結構、大きくてね。田口さんの目からご覧になって創造都市の仕事って、何のためにやってると思われませんか。

田口 僕も全然分からなかった。全然分からなくて、ただ・・・。

小沢 何をやってるか分かりますよね？

田口 博覧会みたいなことをやっているのかな、ぐらいにずっと思ってた。僕も横浜市民だけど、あまり市の活動に、そんなに関心がなくなってしまった横浜市民で、僕が山手の学校にいたときぐらいかな。仲原正治さんもいるから、ああいう「アート屋さん」なのかなとかね。全然分かっていないのですよ。正直なところ。

小沢 「アート屋さん」っていうのは、いい言い方で私もそう思ったんです。

田口 うん。だから。

小沢 だから、いわゆる、市民局がやってたような何とか美術協会だとかね。古くからの文化？事業をやったような人じゃなくて、ちょっと新しいね。

田口 モダンな奴ね。

小沢 モダンなね。

田口 現代アートね。

小沢 そう。現代アートをやってたけど、でもアート屋さんだよって彼らといろいろ議論をし

ていく中でもアート事業屋さんじゃん、と思いました。要するに北沢さんは何をやりたかったかっていうと、特に都心部を活性化させるために、都市計画行政と、経済行政と、文化行政を統合させて都心部の活性化という目的のために事業を展開していくんだと。

田口 いいですね。それはそれでね。

小沢 だけど、やってるのはアート屋じゃないですか。

田口 そう。でも、実際はアートですね。

小沢 そう。

田口 それで事業所的に活性化しましたといっても、それは、現代アートの作家と、あまり金にならない建築設計事務所が増えただけですね。そういうことなのか、とずっと思った。

小沢 BankART、ご存じですね？

田口 うん。借りていた倉庫が使えなくなったのですね。

小沢 組織としてはまた生きてますけどね。そこの代表の池田さんと話すと、横浜でアーティストが食えるようにするっていうのが、創造都市の狙いじゃないんですか、と彼も言うわけですよ。

田口 池田さんがそう言っているの？

小沢 池田さんがね。そういうふうに自分はしたいと。

田口 仲原さんに正確に僕は聞いたことないけど、黄金町だって結構の補助金が出てたんだと。

小沢 今でも出てると思いますけど。

田口 そういうものも、どんどんカットされて、困ってるんだっていうか。

小沢 いや、それは、さっき言った北沢さんの考えた、多分、田村さんと同じ立ち位置なんだと思いますけど、経済と、文化と、都市計画と、都市計画の中にデザイン室があるのか分かりません。もしかしたら、こういうのをまとめるのがデザインと思ってらっしゃるのかもしれないけど。

田口 だから鈴木伸治さん、「大きい都市デザイン」って常にいうわけ。

小沢 大きい都市デザインと、小さい都市デザインと。

田口 うん。

小沢 大きいデザインを常に意識して引っ張ってくれる本部長なり、なんなりがいて。

田口 市長ね。

小沢 そうなんですけど、それは、飛鳥田さんと田村さん、役割が違うわけですから。もちろん、市長がつくれってできるわけなんですけど、そこを、実際の仕事をしていくときのディレクションをしてくれる人が、そういうビジョンを持って、あるいは、そういうビジョンを職員が持つようにやってる、そういう本部だったら行く意味があるなと思う。アート事業屋さんの所にデザイン室が行ったって、単なるちっちゃいデザイン。

田口 そう。

小沢 そういうことです。

田口 競合はしないだろうけど、何だかよく分からない。

小沢 そう。それだったら、さっき言ったような建築都市計画の権限を持つてるセクションとネットワークの中で生きたほうがいい。

田口 僕、この前、都市デザイン室長の梶山さんの講演会に行ってきました。BankART で主催するっていうので、申し込んで行ったわけ。数カ月前にね。

小沢 2、3カ月前にやりましたね。

田口 それに行って質問タイムになって、よく分かったのは、BankART の関係の方々は、池田さんをはじめとして、都市デザイン室がしっかりしてくれないからこうなっちゃったんだと盛んに言ってるわけ。何を言ってるのかというと、「都市デザイン室が横浜を引っ張って、創造都市のような、ああいう流れをさらにつくっていかなきゃいけないんだ」っていうから、そんなこと都市デザイン室にできるの？って。

小沢 いや、それは、その人たちの期待する都市デザインもそうでしょうけど、都市デザイン室は残念ながら市役所の一つの課なんですよ。

田口 そうだよな。

小沢 だから梶山さんがデザイン室長だって見方を変えれば、市役所の中に1000人くらいいる課長の1人なんです。

田口 そのとき、僕は誤解されるようなことを都市デザイン自ら言っているんじゃないかと思ったのは、きれいなパンフレットで切り絵みたいなものが出てきて、ベイブリッジもみなとみらいも、ランドマークそうですけど、みんな都市デザイン活動の成果なんですと説明している。それを見るとみんなそう思うだろうな、と思った。これみんな本当に都市デザイン室の成果なのか、と驚いた。そうすると、都市デザイン室に頼めば何かできるんだなっていう風に誤解する。

小沢 期待されちゃうわけですね。

田口 うん。

田村 それは何？ 鈴木さんがバックアップしてるっていう形になるわけ？ 伸治さんが。

田口 BankART？

田村 いや、デザイン全体に対して。

田口 創造都市をやってるときですか。

田村 うん。

田口 創造都市を盛んにやってるときは北沢さんの東大のお弟子さんだから、一緒にやってたんでしょね。

小沢 鈴木先生は、一時期、非常勤職員みたいな形で創造都市に関与してました。

田口 そうなの？

田村 そう？

小沢 そうです。

田口 だからよく知ってるのか。

田村 だから、ここがつながってるんだ。

田口 時々、なんか役員でもしていたのか、と思うぐらいよく市の内部情報を知っていた。

小沢 そう。そういう名刺もありましたよ。彼は。だから、週に2日来たとか、そういう。

田口 そうなんだ。

田村 だから、この間のメッセージ（「大きな都市デザイン」を市はやるべきだ）になってるんだよ。でも、彼は彼の夢があるだろうから。

小沢 はい。

田口 僕は同じ感覚かもしれないけど、創造都市の活動は「アート屋さん」であるというふうにならずにずっと思ってたことがある。かつ、鈴木伸治先生の講演を何回も聞いて、都市デザインって、そんなに大きいものかなって、それは何かの誤解じゃないのかなと思いながら聞いていました。そうやって聞いてきたから、創造都市というものに対する北沢戦略っていうのは結構、大きなものだったと思う。しかし、中田市長が辞任したため、その後の継続は難しいだろうと僕は思ったわけ。でも、その創造都市とは距離をおいて、若干違うスタンスで都市デザイン室がいたみたいだから、林市長になってからも組織のおとりつぶし、お家断絶にはならなかったと理解していた。

小沢 なるほどね。

田村 お家断絶ね。

小沢 そういう意味で、大きい小さいっていう言い方がいいかどうか分かりませんが、都市デザイン室の仕事としてやり得る範ちゅう。夢は別にしてね。それと、大きく横浜市全体をどういうふうに大きな流れをつくっていくかっていう、デザインしていくかと。それはやっぱり人によって使い分けが違ってから、混同されちゃうと、この大きいやつのディレクションをしているのはデザイン室長だろうという期待になっちゃったって、ある意味、不思議じゃないわけですよ。

田村 そうだよな。

田口 思っちゃうかもしれないね。

田村 思ってもいいんだよね。

田口 いや、まずいんじゃないかな。

小沢 デザイン室の、ある意味、悪いくせで、今、実際、実務上関わってないことも、昔のそんなような発想の下に、こういうのを見ると、これもデザイン、あれもねと言うこともある。

田口 そう。

小沢 だから、私は実務で、さっきも言ったようにソフト系の、例えば、ここの市民活動支援課って、私、ここの課長だったこともありますし、市民局の地域振興課の企画係長っていうのに、初代として、なったりしたことあるんですけど、そのとき、今のNPO施策だとか、市民活動センターをつくらうとか、そういうことをやってたんですけどね。実際、都市デザイン室とは別に全然関係ないですよ。実務上はね。たまに意見をいうとか、そんなこともないですよ。だけど、こういうのに載ってるわけですよ。

田口 そうなの？

小沢 だから誤解されちゃう。だけど、意識として、ほんのわずかな意識でも、田村さん書かれてるように市民協働で初めていい景観ができるんでしょと。そこに住んでる市民の心の内の表れが、その地域の景観なんですっていうことであれば、市民活動の支援とかも視野に入れるのは当然。ただ、ディレクションできる実力があるのかとか、実務上、きっちり連携してるのかって、それは全然別の話。

田口 だから、僕らは、飛鳥田市政から細郷市政に変化し周辺環境が激変した時代の姿勢は、企画して関わって実際に調整してなんぼだから、自分たちが調整してないことは一切、載せるべきではないという時代でしたよ。あの時代は。

小沢 それは田口さんの時代？

田口 うん。

小沢 それはそれで、もちろん、一つの見識っていうか、考え方だと思いますけど、逆に広い意味で田村さんが書かれてるような視野でもって、市役所の仕事のそういうものも網羅していく。視野には入れてるんだという意味も一つの考えではないですか。

田口 いや、そういう視点で言えば、ランドマークタワーのことが、頭にこびりついて離れないのです。これ国吉さんの言葉ですけど、ランドマークのデザインとクイーンズの海に向って階段状に下がっていくデザインは、都市デザインの成果なんだと盛んにいわれるわけですよ。

小沢 国吉さんが？

田口 うん。だから、どこで都市デザイン室が、あれに関わったんだろうと。僕は歴史的には関わりが全然なかったはずだ、と思っている。

小沢 そう。それは私も結構、不思議で、国吉さんのね。国吉さんと私、結構、付き合いましてんで、国吉さんのいろんなレクチャーみたいなもの一緒に行ってやったりしたんですけど、国吉さん、そこまでデザイン室がやったっていいんですかねみたいなのは結構、ありました。

田口 そうでしょ？

小沢 ありました。ただ、国吉さんと、役所的に言えば部長と課長ですから、一心同体なんですよ。とにかく部長の下の課長って私一人しかいないですから。国吉さん、本当、独立愚連隊。部長になって愚連隊じゃないけど、要するに普通の役人が考えられないことをやるわけですよ。というのは、ランドマークの話は分かりませんが、ある日突然、全然関係ないセクションの、部長だとか、課長だとかね。場合によっちゃ局長だとか捕まえて言うことをきかせちゃうんですよ。100%でないにしても、ある種のディールをやっちゃうわけですよ。それで結構な成果をあげたっていうか、考え変えてもらったりなんかをする。

田村 愚連隊だ。

田口 そのやり方は昔からそうでしたね。彼は例えば、今でもよく思い出すけど、フランス橋の件で、道路局の幹部連中を彼をよく知ってるわけだから、ご用聞きをしながら、ばんばんとまとめちゃったんだよね。それで、最初は変な歩道橋だったけど、それを、ああいうふうに住立って直しちゃった。僕は一緒には動かなかったけど、見てて、よくやりますね、と感心した。彼は個人技でやり切る。

小沢 できちゃうんですよ。

田口 うん。タメ口で、ようって言って、幹部連中と話ができちゃうわけ。

小沢 私が室長だった頃って、もう国吉さん 60 歳ですから、局長級とか、みんな同期の、同世

代の、それこそタメ口聞ける人。だから、例えばの話、ある日突然、局長室に行って、ちょっとこれがこうなんで、どうのこうのといって、分かったよと。局長が国吉さんから聞いたなんていうことは一言もいわずに、部下にこういうふうによれよといえ、そうなっちゃうわけですね。簡単な話。シンプルイズしていく。

田口 そう。

小沢 国吉さんの、役所の公式見解には、そんなの全くないし、その局の中でもデザイン室と調整してこうなったなんて残らなくても、国吉さんの頭の中では、あれは都市デザイン活動の一環だというのはあったかもしれないですね。

田口 うん。それはいいんですよ。ただし、僕がもっとびっくりするのは、今回、情報開示の準備としていろいろ調べてもらったのだけど、例えば、ランドマークタワーをつくる時に、市の方針決済書やそれに関わるもので、こういう開発を認めます、よろしいですか、というものが通常あるはずだ、と思っていた。いつの段階かで、絶対あれだけのものだからあつたらうと思つたら、一切ない。あるものは、最後の特定街区の指定の時、それは当然手続的にはとるので。重要な最初の方針段階のものがない。制度的なものは直前に全部決まって、1日前ぐらいにとることがある。

小沢 はんこをね。しかるべくもらうと。

田口 それはありますよ。当然のごとく。その前のやつが一切ない。

小沢 個人メモだとすれば扱いとしては行政文書じゃないですからね。

田口 違う。つまり、あれだけの開発をやるためには、容積割増を含め、いろんな街区開発の在り方を含め、市が内諾を事業者に与えないとできないんですよ。

小沢 そうですね。

田口 あれだけの開発は、構想段階から施工に至るまで何年もかかっているんだから。

小沢 はい。階段を上がってかなきゃいけないわけですよ。

田口 そうすると、みなとみらいの一番重要な開発だから、当然、市に協議をし、当然、市の内部である意思決定をして、その内諾を与えてよろしいということがされてなければ、あれだけのものはできない。そうすると、文書は絶対残っているはずであると。それも市長レベルのが残っていないと、おかしいと僕は確信したわけ。ところが、都市デザイン室にも、みなとみらい担当にも調べてもらったけど、一切ございませんという回答だった。それはそれでいいんですよ。存在しないということがハッキリしたので。

そうすると、非公式な接触があつたとしても、公式なものが一切残っていないのは、いかななものか、となる。それで、これだけのものができちゃった。それが当時の実態なわけですよ。だから、そこに実は誰かが関わっていたんだと言ってもよいけど、僕も、あれは経済投資として意味があるから全く否定しない。既に都市美対策審議会というものもありながら、デザイン調整であれが何故かからないのかがおかしい。

小沢 当時、横浜市の主導でみなとみらいデザイン調整委員会とかって。

田口 それはあつたでしょ。実態はあれができた後でしょ？ あの前？

小沢 いや、前かなと思います。

田口 ランドマークの。

小沢 直後？

田口 いや。あれをつくるのが一番、実体的には最初だから、その後追的だった。だって、みなとみらいまちづくり指針って、ランドマークの開発を決めてからつくったのだから。(注：「みなとみらい21街づくり基本協定」の締結は1988年7月、ランドマークタワーの構想は1984年6月の三菱地所会長の田中乙一の「日本一高いビル」構想発表から始まり1987年8月には米国デザインコンサルタントのヒュー・スタビンスと契約している。それ以前にも三菱地所内部で超高層の計画をしている)

小沢 そうですか。ちょっと時期が前後するんで、あまりいえませんが。

田口 あれありきで、開発の形態が全て決まってるんですよ。

小沢 私、一回、伺おうかと思ったんですけど、田口さん、新本牧開発とかにいらっしやっただじゃないですか。新本牧のデザインガイドラインつくられましたよね？ それって都市デザイン活動ですか。

田口 広くいえばそうじゃないですかね。

小沢 広くいえばですよ。

田口 ただ、あれを都市デザイン活動といっても、都市デザイン的には、最後のガイドラインの内容もちょっと寂しいものなんだけどね。

小沢 寂しい？

田口 寂しい内容というのも変なのですが、あれですべてを誘導できるわけじゃなくて、区画整理で誘導している部分が多いのです。区画整理の換地割りで共同建築の協定を誘導しているのです。それに基づいて、大きい共同ビルは大体、できちゃってるわけです。だから、あれを決めて有効なのは戸建て住宅地ですね。

小沢 そうなんですか。

田口 だから、あって邪魔になるもんじゃないから、地主さんたちが自分たちでやりたいっていう人たちと、あまりどうでもいいっていう人たちも巻き込んでやってるから、あれの必要性はありますけどね。それはなぜ？

小沢 いや、さっきの話と共通するんですけど、大きいか小さいかは別についていうのは、一本、見方としてあるとして、デザイン室って一つの課であると。上下の関係で、あるいは、大小の関係で、さっきみたいな話になるわけですけど、デザイン室と横に同じ課の立場で、新本牧開発室もあり、ニュータウンは部ですけど、ニュータウンもあり、横にセクションがあって、それぞれの地区でやってる。みなとみらいもやってるわけですよ。そこで、都市デザイン的なことを実現するためのルールづくりもするし、市民協働もするし。

田口 そう。

小沢 ですよ？

田口 やりますね。

小沢 意識としてはいいまち、魅力的なまちをつくろう。その新本牧でもやられたと思いますけど、両方ご存じの田口さんから見て、新本牧のまちづくりの中でやられていた無電柱化とか、色彩だとか、傾斜屋根とか取り組まれたと思いますけど、それはオール横浜市のデザイン活動ではあると思ってらっしゃいました？

田口 そうでしょうね。



小沢 だけど当然、デザイン室ではないですよね？

田口 デザイン室というセクションが、あれには関わってないからね。

小沢 関わってないですよね。直接はね。

田口 うん。だから、あれは関わる必要がないと思ったのでないですか。もう流れができちゃってるので。

小沢 流れがね。だから、最初にコンペやった頃と違って、国吉さんが入ったばかりの頃ですかね。

田口 国吉さんが建築学会の関東支部のコンペをやられたらしいけど、その記録は残ってないんだよね。

小沢 残ってない。そうか。建築学会関東支部だから、市は別に直接は。

田口 市は直接は関係ないです。

小沢 ごめんなさい。そのへんになると確かなことはいえないんですけど、要は縦の系列の中で大きいか、一つの課の小さいっていうのと同時に、横の関係でセクションとしてのデザイン室じゃない所もデザイン活動をしていたと？

田口 そう。

小沢 そういう広いか狭いか。そっちもありますよね？

田口 それをあるでしょうね。ただし、デザイン室がそれなりの中核的な役割、あるいは、そこに相談するといいいことがあるっていうか、助けてもらえるとか、協力してもらえるというものがあることが重要ですね。だって具体的には本牧だってマンション開発をやるときに管理棟として、かつて山手にあった洋館の復元をするので北沢さんに頼んで図面をもらったことがある。

小沢 山手 250 番館ですね。

田口 あの図面をもらって実測をした関東学院大学の先生を紹介してもらい、三井不動産に、これやってみたらどうですかと交渉した。当時は事業者側も資金的に余裕があったから、建物を復元し資料室も新設できたわけだね。だから、そんなことができちゃうわけ。それは一つの例でしかないけど、いろんなことで、デザイン室にいうと何か協力してもらえる要素を持ってる。データを持ってる、資料を持ってる、ノウハウを持ってる、人的な紹介がされるとか、何とか、そういう機能があることが重要ですよ。だから、そういう機能が今後もあればうれしいなって。

小沢 さっき景観条例つくるときに役割分担をめぐって悩んだ話をしましたが、デザイン室以外のセクションがみなとみらいとかも含めて、自分たちでデザインするんだと。役所の仕事のにいえば、うちの課でもデザインやってるんだと。横の連携でデザイン室、特に頼りにしたりもするし、協力し合えばいいじゃないかと。そういう横の層が、だんだん寂しくなってるみたいなのにも。

田口 なってるでしょうね。

小沢 その条例化以降ね。

田口 そうでしょうね。

小沢 ちょっと感じます。

田口 そうでしょうね。なるでしょうね。だから、やはり、そういう中枢的なものを持ってると、みんなそこと協力しながらやっていこうっていうことになるけど、それがあまりないと自分たちで適当にやっときます、という話になっちゃうだろうな。

小沢 だから、創造都市の話なんですね。そういう意味でっていうか、創造都市事業本部には、私もデザイン室入ったらいいじゃないかといわれましたけど、いろいろ話もありましたけど、さっき言ったようなことで少なくとも私は賛成をしなかったし、そっちの方向で動かなかったですね。

田口 よく分かりましたね。今もあるんですしたっけ？ 創造都市って。

小沢 あります。文化観光局っていうのになった。

田口 観光局に属してる？

小沢 文化観光局。

田口 創造都市っていう名前は？ ないの？（注：文化観光局創造都市推進課として存在している）

小沢 その中にあるんじゃないですか。だと思えますけど、文化観光局の中にあるんだと思えますけど。すいません。今のことは詳しく聞かないでください。

田口 分かりました。ちょっと忘れないうちにもう一つ。一時期、市民協働って内藤恒平さんがやってたじゃないですか。市民協働っていうのは、どんなものでしたか。なんか資料もさっきいただいたみたいですが、今も小沢さんの理解では、市民協働というのはデザイン室として重要な項目であるということですか？

小沢 さっきの広い狭いでいえば、広いほうとしては、すごく大事なんだろうと思います。それは、あらためて田村さんの本を読み返してみると、そういうことなんだろうなと思いますね。ただ、残念ながら私が市民活動支援の仕事をしていた頃、市民局の係長だった頃って、関わり合いは、内藤さんがやっていたのはもちろん知っているし、連携もしてましたけど、多分、私でなければ市民局でそんなことをやろうなんていう人間はいなかったと思う。

田口 内藤さんがやってたとき、ちょうど小沢さんがあれだったんですか。

小沢 平成5年に、私は市民局の区政課。区の政治の課の担当係長だったんです。

田口 待って。ごめんね。

小沢 お手元のペーパーには書いてないと思います。だから付け加えたほうがいい。

田口 平成5年って何年？

小沢 平成5年。93年ですか。

田口 93年に？

小沢 市民局の区政課担当係長。そこで、本来、何をするかっていうと、区役所の機構改革をするにあたって、地域部門、まちづくり部門、それから窓口部門を担当しろっていわれたんです。地域部門として、当時、自治会町内会とか、既存団体だけでは地域活動とはいえないんじゃないかと。自治会も今、加入率落ちてますけど、その頃から落ち始めてるんですね。一方で、今でいうNPO活動なんかが出てきて、新しい動きに対応することをしなさいと。というか、そういう意識をして区役所の地域振興部門の在り方を考えて。それで私が、まず着目したのは、新しい市民

活動の動きを一番把握して、対応してるのは都市デザイン室だと。だから、内藤さんのやってる仕事に近づいて行って、そこから情報をいろいろいただきました。

田口 そうなんですか。

小沢 はい。

田村 どういう情報ですか。

小沢 簡単にいっちゃいますと、今でいう NPO。当時はまだ NPO っていう言葉はあまり普及もしてなかったし、NPO 法もできてないんですけども。いいまちをつくっていくための活動。既存団体にこだわらずね。既存団体、またいでもいいんですけど、そういう活動をしてる人たちときっちりつき合ったのはデザイン室なんです。

田口 僕も本牧でやりましたよ。

小沢 本牧でね。やってたっていうのはどういうことですか。内藤さんがやってたっていうことですか。田口さん？

田口 違う。いいじゃん会ってというのがあって、一緒にやりましたよ。

小沢 そうですよ。いいじゃん会も時々、話題には出ましたけれども、そういういいまちをつくるための活動をしてると、ぼつんぼつんっていろいろあるじゃないですか。だけど、役所の組織っていうのは、ここは自分の仕事でやって、そこと協力関係にあるってなればそれなりにやりますけど、多くのセクションは、もう付き合うことが決まっている、半ば官制団体と付き合い合ってるわけですよ。

田口 当然ですよ。

小沢 それは、ある意味、当然なんですけど。それはそれでいいんですけど、そうすると、要するに既存の団体、もしくは既存の動きをする団体しか把握できないわけです。昔ながらっていう補助金をぶっ込んでとか、事務局ごと丸抱えをしてるような団体でないと認知されないわけですよ。そうじゃなくて市民が自主的に始めた団体っていうのは、何これ？みたいな。うまい具合に、いいじゃん会みたいに本牧のまちづくりの中で、うまく行政の職員と関係ができてくれればいくんですけど、ちょっと単発的なんです。だから市長から表彰状をもらったりも何もしないわけですよ。そういうものを集めて、お互い情報交換をする場をつくったりとか、発表しあったりとか、共通するノウハウを勉強するとか、そういうところに手がけ始めたのが内藤さんだったんですね。内藤さんのやっている市民まちづくり。

その動きっていうのは、私が担当者の頃、主にナカノさんが担当してたんですけども、あるいは、田口さんのお仕事の流れていくと、区の魅力づくりをするのに、例えば、プロムナードをつくりましょうと。そのプロムナードをつくるにあたって地域の沿道の市民のかたがたの意見を聞きましょうと。意見を単なるご要望として聞くんじゃなくて、一緒にいいものをつくるための活動をしましょう。そういうのを横文字でいうとワークショップですねというようなことを、私は直接、あまり担当しなかったんですけど、当時、やりましたね。80年代の後半。それも結構、北沢さんが、これからはそういうのだと。南区のプロムナードをつくるのに、AURの山路さんに入ってもらったりであるとか、そういうことをしてましたんで、私はデザイン室と市民活動の協働っていうのは、当時の視点でいくとデザイン室らしい、いいプロムナードなり、魅力的な空間をつくるために市民の人に集まってもらって、活動してもらって、いい意見の吸い上げをすると。それがデザイン室流、市民協働だと思ってました。手法としてのワークショップとか、そういうことはいち早く取り入れたと思うし、ナカノさんも頑張ってたし。

田口 でも、このセクションはある時期になくなっちゃってるじゃないですか。

小沢 はい。その流れでもって、もうちょっと加えさせていただくと、内藤さんが登場するときっていうのは。

田口 国際会議をやってましたよね？

小沢 そう、デザイン室は結構、細郷市長時代かな。私が担当した、歴史を生かしたまちづくりも含めていろんな実績が出てきた時代なので、それを集大成して、いろんな人の意見をさらに聞いてっていうので、国際デザインフォーラムみたいなことで。その一環として地域展開プログラムって言って、多少のお金もついて、そういう活動をさらに運営しようというのをやってましたね。その流れの中で浮かび上がってきたいくつかの活動団体を、さらに発展的に、まちづくりと一緒にやっていこうということでセクション化されたのが、内藤さんが担当していた市民まちづくり担当だったかと思います。

田口 それがある時期で。

小沢 終わっちゃいますけど。

田口 これを読んでもと、企画に移した。

小沢 企画調査課。隣ですね。

田口 のほうに行ったんだとかいう、彼女の所か。

小沢 彼女？

田口 このヒヤリングに出てきている。

小沢 大蔭さん？

田口 じゃない。カヤさんか。

小沢 カヤさんね。オオカゲさんの次の担当がカヤさん。係長は、最初はオオツカさん。次がアキモトさん。それ企画調整課のまちづくり。市民まちづくり担当で。というか、担当としての正式な名前はなかったんだと思います。

田口 そっちのほうに行ったという。

小沢 だから、その担当としての性格はあまり変わってなかったと思いますよ。デザイン室のやってた頃から。オオツカさん、アキモトさん、それぞれ個性があるし、オオカゲさんも、カヤさんもそれなりに頑張ってたんで、その個性の違いはあったかもしれないけど、基本的なスタンスは同じだったと思います。内藤さんが活動団体をいっぱい集めて、市民まちづくりフォーラムっていうのをやるのを一つの集大成にしてたわけですけど、その後は、内藤さんも意識したと思いますけど、まちづくりセンターをつくらうというのが一つの到達目標としてあったんですね。それは、オオツカさんもいってたし、多分、アキモトさんもそう思ってた。だけど、当時、平成5年ぐらいにつくっていた高秀さんの新しい総合計画。改訂版、ゆめはま2010プランっていうやつで、まちづくりセンターが事業計画にはならなかったんです。そこをどうするかっていうのはあると思うんですけど、私が知る限り、デザイン室から企画調査課に移ったっていうのは、割と幅広くジャンルを超えた活動を対応していくためには、デザイン室じゃないほうがいいんじゃないかということじゃなかったかと思います。それは企画調査課の、ある意味、本来、広い視野を持ってね。

田口 それが、こういう活動になっているんですか。

小沢 いや、それは、まちづくりセンターをつくらうということで盛り上げてはいたんですけど、横浜市全体から見ると都市計画局がそういうことをやってるのねという見方で、一方で、ゆめはま2010プランの事業計画に位置付けられていたのは、ボランティア情報センターっていう名前の仕事があって、それは企画局が考えて福祉局所管かなみたいな感じだったんですよ。当時、

私が市民局にいたわけですけど、これからの市民活動、つまり、NPO とかっていう、既存の活動スタイルにとらわれないで、市民が自主的に行う、役所のお抱えじゃない団体活動、市民活動っていうのはまさにジャンルを超えてるんだから、それは市民局でしょということで、私も若干の主張をして、市民局の仕事として、その後、継続されて、市民活動推進条例とか、そういうのをつくって、まさに制度もつくり、施設もつくりっていう中で、この場所（市民活動センター）もできてると。

このへんは、アキモトさんに聞いていただくのがいいかと思いますけど、都市計画局のまちづくりセンターっていうのは、そういう意味での結実は迎えなかったですね。だから、北沢さんが晩年やってらっしゃった UDC とかね。それに類する活動が田園都市線のほうでできてるのかも分かりませんが、横浜市として市民活動全般を支援するための箱をつくったりとか、制度をつくったりとか、法律上の認証事務も、ご存じのようにやっていますけど、そういうものの流れは市民局の流れでやった。平成8年に私、そのことのために海外出張に行つて、1カ月ぐらいイギリスとアメリカに行つて、よろしければお持ちいただきたいんですけど。当時、田村さんがイギリス？ここに参考文献で載つけたんですけど。

田口 田村さんがいた頃ですか。

小沢 いらっしゃった後。何回か行つてらっしゃいますよね。

田村 いや、行つたのは1回。

小沢 1回だけですか。長期で行かれたのは1回だったですかね。そのとき、北沢さんにいわれて私の知り合いのイギリス人を紹介したりしたんですが、お会いにはいなかったようです。

田口 その後か。小沢さんの後？

小沢 ちょっとすいません。前後関係はつきりしません。ただ、ここで、ちょうど総合計画に位置付けられていることもあり、市民局の仕事として、私も自分の考えで市民局でやったほうがいいということで、自分が担当する係長になっちゃったんで、そのイメージを具体化するために先進国であるイギリス、アメリカ。主にイギリスですけれども行つて、その市民活動っていうのは外国ではこういうもので、支援する組織なり、施設っていうものはこういうものがあるんだつていうのをつぶさに。

田口 これ発表しましたか、どこかで。

小沢 まち研ではやりましたね。

田口 どこかでやりましたよね？

小沢 はい。

田口 聞いた感じがあるな。

小沢 そう。まち研に田口さん、いらしたかもしれないですね。

田口 うん。そんなことをやったんだと。

小沢 そのときに田村さんにも聞いていただきました。だから、デザイン室の市民協働っていうことで、それこそ室の活動。デザイン室がやってるまちづくり活動っていうんですか、そのハードをつくる上での、より市民的な参加っていう意味での市民協働っていうふうにとらえるのか、それとも大きい横浜市全体の都市をプランニングする中での市民力。広い意味での市民力を盛り上げていく。あるいは、市が何かの仕事をするときには市民と協働でやっていくみたいなことを大きくデザインしたのがデザイン室かっていうと、実際、市民局で担当した自分からすると、ちょっとそうはいえない。デザイン室じゃなくて大きな視野で、具体的に誰とはいへませんが、

大きな視野の中で都市をデザインしていく一環としてあったんだろうといわれれば、そうかもしれないけど、具体的に、田村さんみたいにディレクションされる方がいらっしやらないので、その1セクションの仕事としては市民活動支援っていうのはやってたと思うし、私は、内藤さんなり、オオツカさんなり、アキモトさんとも一緒にやってたので、連携していたと言えると思います。

田口 大塚さんって、大塚宏君？

小沢 そう。それがこっちのアキモトさんと共著。

田口 なるほどね。

小沢 ていうのは、平成7年に高秀市長が当時、好きだった政策プロジェクトっていうね。どうぞ。差し上げます。各局からテーマに沿って、自分の考えを持ってるなり、勉強の意欲のあるやつを集めて数人でプロジェクトチームをつくったんですよ。そのプロジェクトチームのトップが内藤さんで、それから、都市科学研究室にいらっしやったナカガワクミコさん。

田口 中川さん。

小沢 私と、アキモトさんと、今、中区長やってる竹前さん。この5人でチームをつくって、パートナーシップ推進モデル事業っていう3カ年事業を立ち上げて、ちょうどその年に私が海外へ行って、帰ってきた4月からパートナーシップ推進モデル事業をやる。ついにはおまえが、その事務局をやれというふうに当時の総務課長から内々にいわれて、4月から一緒に。一緒になって市民局が中心になって、都市計画局の企画調査課と、それから当時の企画局と一緒にやるっていう体制、3局でやるんで3局トライアングルなんていってたんですけど、そのときの状況、検討から、そのプロジェクト推進モデル事業っていうのをやった経過っていうのがこれに、アキモトさんと一緒に書いた。

田口 ざくっといって、高秀さんってどうだったんですか。都市デザインに対する支援度っていうか、理解度っていうかは、あったほうなんですか。

小沢 あったと思います。

田口 そうなんですか。

小沢 そういうふうに見えませんか。

田口 僕はもう彼になった途端に左遷されて追い出されたものだから、実態の空気は分からないんですよ。中田さんはあんなもんだらうっていうのは、創造都市で分かるんだけど、細郷さんも分かるんだけど。高秀さんって、本当はどういう人だったのかよく分からない。

小沢 もちろん、私もばっちりおそば近くに仕えてたわけじゃないので、自分が関わったところだけ申し上げますけれども、市民活動の支援もこれから必要だからきっちりやりなさいというのをおっしゃったのも高秀さんだし、とりわけ、これから市民活動を活性化させていくためには、今、当たり前に出してる市の補助金っていうのがあるけど。憲法89条の絡みからしてどうなんだと。そういうところからしっかり考え方をしなきゃいけないっておっしゃったのが高秀市長ですね。そのための委員会をつくって、当時、私は企画局だったんですけど、いい仕事をやらせてもらったなと思いますね。そのときは。

田口 そうなんですか。

小沢 はい。その後、ちょっと政治的な意味でいくと、当時、横浜市会に横浜ネットっていうのがあって、それと高秀市長のそれが与党になるだの、なんだかんだでこじれちゃった部分もあるんですけど、そういうところは着目してらっしゃいましたよね。もう一つ、私のかつての担当した仕事で歴史を生かしたまちづくりっていうのがあって、職員レベルでいろいろ検討していく

中で開発優先の考え方ももちろんあって、だけど、最後、高秀市長の決断で、今でいう都市発展記念館や横浜市外電話局あたりの保存。あるいは、地方裁判所を建て替えるときに原型を忠実に復元するとか、そういうことは結構、トップレベルでご指示がありましたよね。その場面では、私は直接、デザイン室にいなかったんですけど、国吉さんから聞くと高秀市長はそういうところで残さなきゃ駄目だろうとおっしゃってくださった。

田口 まともだね。

小沢 そういうね。いや、他のことは知らないですよ。他のことはあまり知らないですけど、そういうことは、私はすごく印象深く聞いて。

田口 真面目な人なんだな。

小沢 ある意味で真面目っていうか、私の今の感覚でいうと品格のあるところを目指してらっしゃったんだろうなっていうか、思いますね。

田村 そこまでいうと、女性市長になったときは何年かまだ市におられましたか。

小沢 ぎりぎり何年かいましたね。

田村 ぎりぎり何年か。

小沢 さっきの高秀さんの話をもう少ししますと、後に財政局長ってやったのかな。財政の課長がいて、当時。ちょっとざっくりと話せる関係ではあったんですけど、裏話的なことで、具体的にどういふふうなのかは忘れちゃいましたけど、財政って一生懸命事務的に要求、各局からされた予算を、こうやって整理して、額けずって調整して、こういうところを目玉事業としてとかって、副市長の会議に持っていくわけ。最終的には市長のところへいくわけですけど。そこで、自分たちが考えたのと違う指示をされるって、ものすごい印象に残るわけですね。それでいいよっていってくれば、彼らはそれで終わりなんですけど。それですごく印象に残ってるのは、歴史的建造物を保存する仕事だと。さっさと壊しちゃってみたい事業計画を含んだ予算案を持っていくと、残さなきゃ駄目じゃないか。金かけてもやれみたいなことを。その人にいわせると、市長の道楽だからしょうがない、付き合わないわけにはいかないんだよなみたいふうにいってましたけど、逆にいえば、並の金勘定の第一とする役人のレベルを超えた見識をお持ちだったんだろうなと私は思いましたね。政治家でらっしゃるんで、毀誉褒貶は、それはいろいろあると思いますけれども。

田口 なるほど。

小沢 トップの話が出たんで、ちょっと申し上げますと、私的にデザイン室の仕事をさせてもらって、特に景観条例とかを思うと、形をつくる、形どおりにやる、数値どおりにやるみたいなのは、いってみれば凡人でもできるし、だけど、それ以上のものはできない。ちょっと一歩踏み出して仕事をすると、当然、はみ出していること自体に反発もあるし、制度に乗っかってないことは一切やりたくない人も役人にもいるし、市にもいる。でも、やろうとする人の原動力は何かって、法律で与えられた権限うんぬんじゃなくて、ある種の精神性を持った人でないと、公務員としても、あるいは、一緒にやる相手方さんとしても、いいものできないなって。私の経験上、その歴史的建造物を保存するにあたって、相手が法人っていうか会社だったりとか、宗教法人だったりとか、個人だったりしますけど、やっぱり気持ちのいいものをつくろう。自分も協力しよう。歴史に対する意思も、敬意も持って未来につなげていくみたいなの、それを総称して品位とかいうと、やっぱり品位のある人じゃないと法律でこうなってるからしてくださいっていう以外のポキャブラリーが、なかなか通じない。ここで協力すると後でいいことがありますよとか、それはあるかもしれないけど。

歴史的建造物の保存に協力的だった人、そういうのを話された人だし、今からっていうか、だいぶ前から思ってたんですけど、結構、宗教に対して真摯な人が多かった。考えてみれば、宗教法人の持っているものは、宗教そのものだから別にしても、あの洋館のオーナーは、クリスチャンなんだとかね。あるいは、会社の人でも、この人って会社員を超えた品位を持っている人だとか、

あるいは、まちづくりのリーダーが、実は、某神社の責任役員だったりとか、それは後で知ったんですけど、そういう商売上の単純なそろばん勘定とか、あるいは、法律で決まってるか、決まってるかをいうことだけじゃなくて、何事かを持ってる人でないといい仕事、いいまちをつくる活動はできないのかな。逆にいえば、そういう精神性が乗かって、初めていい活動をしてくれているんだろうと思うし、田村さんの本を、当時から少しは感じてたんですけど、読み返してみると、それをお持ちだったんで広い視野を持って具体的にいい仕事をディレクションされたと思うし、人も育てていただいたのかなというふうに思いました。

田口 はい。ありがとうございました。

田村 ありがとうございました。

(了)